

民衆の選択

1995年タンザニアの総選挙から

根本利通

1995年のタンザニアの話題の中心は、独立後初めての複数政党制による総選挙であった。前年末から大統領の後継者選びの話題で幕をあげ、不正や茶番を含めた紆余曲折を経た後、12月に新大統領による内閣・次官の任命をもって終了した。今は祭の後のようなけだるさの中で、与党3人目の大統領による新政権の行方を見守っている。今回の結果ははたしてタンザニア民衆の希望の現われと言えるだろうか。

1 総選挙への歩み

タンザニア連合共和国は本土（タンガニーカ）と島嶼部（ザンジバル）から成る連合共和国である。ザンジバルは全人口の3%弱しかもたないが、歴史的経緯から独自のザンジバル大統領を擁する自治政府を持ち、今まで連合共和国の正副大統領の内の一人、選出議員の28%を占めるなど優遇されてきた。従来もそして今回もザンジバルの処遇が、常に政局の焦点の一つとなっている。

タンザニアは初代大統領ニエレレのウジャマー社会主義によって、また南部アフリカ解放のための前線諸国会議の議長国として、第三世界の中で重きをなしてきた。1980年代に入って経済的破綻

が明らかになると、軌道修正を余儀なくされ、85年の第2代大統領ムウィニの登場となる。

このムウィニ政権の時代、世銀・IMF指導下で、構造調整政策が実施され経済の自由化が進んだ。社会主義体制の根幹であった国営企業や公社の解体・民営化が進み、外国資本の投資が奨励され、農村でも土地保有権の売買が行なわれている。その一方でODAが大量に流れ込み、その援助を巡って収賄・汚職の構造化が進んだ。

1994年11月、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドといった主要援助国が援助を凍結した。理由は、不透明な免税措置や脱税が大幅な歳入欠陥をもたらした、しかもそれには大蔵・国税当局の収賄が絡んでいるためということであった。同時期ニエレレが著書の中で、首相と与党革命党(CCM)書記長を名指して批判したことも相まって、ムウィニは12月内閣改造に追い込まれた。首相、CCM書記長、蔵相は更迭され（ただし別の国務相に横すべり）、副首相兼内相ムレマが労相に降格になった。

2 混乱の連合共和国大統領候補選び

今回の総選挙の一方の主役となったムレマは、

1990年第2次ムウィニ政権で内相になり、警察を握って汚職・腐敗摘発キャンペーンで名を上げ、貧しい一般民衆にはかなり人気があった。95年2月、インド人実業家のスキャンダルに対する政府の対応を非難したムレマは労相を罷免され、その結果CCMを離党、「建設と改革のための国民会議」

(NCCR)の議長兼連合共和国大統領候補に収まった。ムレマのゆくところ大聴衆が集まり「汚職大臣の裁判」が公言され盛り上がりを見せた。3～5月頃は巷間の話題の中心であり「今度は変化だ。ムレマにやらせてみよう」と力説する人たちが多かった。

CCM側の連合共和国大統領候補選は混沌としていて、15人もが立候補したが、CCM中央委員会でムスヤ首相、キクウェテ蔵相、ムカパ科学技術高等教育相の3人にしぼられ、CCM全国執行委員会では下馬評の低かったムカパが当選した。この背景には「国父」ニエレレの強い推しがあったと広く信じられている。ムカパは開発の遅れている南部出身で、ジャーナリスト、外交官を経て、情報相、外相を歴任、清廉であり官僚として有能という評判である。

当初、有力野党のNCCR、市民統一戦線(CUF)、民主開発党(CHADEMA)の統一大統領候補としてムレマが内定しており、ムカパでは大衆に人気がないためCCMの苦戦が予想されていた。が、NCCRが副大統領候補に亡命中だったザンジバル出身のバブーを勝手に決めると野党間に亀裂が入り、CUFは独自候補リブンバを擁立した。統一民主党(UDP)のチェヨも加えて、野党側の連合共和国大統領候補は3人となり、国会議員選挙での野党共闘もお流れになった。リブンバが唯一のムスリム候補であることも手伝い、得票結果次第では1回の投票で決まらず、上位2人による決選投票の可能性もささやかれた。した。

3 不透明なザンジバル選挙結果

1964年4月にタンガニーカと合邦して連合共和国の一部となるザンジバルは、63年12月の独立前に3回の複数政党制による選挙を経験している。それはアフリカ人对アラブ人という人種対立を絡めた熾烈な選挙となり、独立直後の64年1月の流血を伴った革命につながった。さらに革命後の歴代5人のザンジバル大統領は全てザンジバル島出身者で、ペンバ島の人々は経済的になおざりにされているという不満をもっている。したがってペンバ出身のセイフ・ハマドをザンジバル大統領候補にかつぐCUFとCCMとの対決は、経済的、地域的、人種対立をひっくるめて激しいものとなった。脅威を感じたCCM政権側はありとあらゆる手段を用いてCUFの運動を妨害した。つまり、CUF党員の公務員の免職、CUF集会の禁止、弾圧、ペンバ島における選挙人登録の意図的遅滞、ザンジバル島在住のペンバ人の登録拒否等々である。

10月22日、折からの雨にもかかわらず、大勢の人々が投票に赴き、94.9%の投票率を示した。多少の不手際はあったものの投票は比較的スムーズに行なわれ、国際監視団も「自由で公正」と評した。おかしくなったのは開票に入ってからで、特にペンバでCUFの圧勝(全議席を取る)がはっきりしてから開票が遅れた。CUFが開票の再点検を言い、CCMは選挙の無効を言いだした。民間テレビ、新聞ではCUFの勝利が報道されたが、4日後になって選管が下記のとおり発表した。

ザンジバル大統領選挙

アムール (CCM)	165,271 (50.2%)
ハマド (CUF)	163,706 (49.8%)
無効	4,922
ザンジバル議会選挙	
CCM	26議席
CUF	24議席

上記の選挙結果を額面どおり受け取る人は殆どいない。選管発表の翌日、間髪をいれず宣誓式を行いザンジバル大統領に就任したアムールは、従来の慣習を破ってペンバ人でない首相を任命、内閣にもペンバ人をほとんど登用せず、強権的な支配を始めた。ザンジバル在住のペンバ人が嫌がらせに会うことも頻繁で、不安定な情勢になっている。

4 総選挙の結果

ザンジバルでの選挙不正が表面化する中で、CUFがボイコットの構えを見せたが、結局予定どおり13政党が参加して、10月29日連合共和国の総選挙が行なわれた。しかし各地で混乱が起こり、特にダルエスサラームでは投票箱・用紙の不足、選挙立会人の不在で投票できない人が多く、翌日まで投票が延長されたが、不正の証拠がいくつも見つかり、結局3週間後の再選挙になった。しかしこの間に野党が求めた他地域の開票結果の発表停止が認められず、地方の開票の結果CCMの圧勝がはっきりし、多くの野党がボイコットを呼びかける中で、ダルエスサラームの再選挙が行なわれた。最終結果は次のとおりである。

連合共和国大統領選挙

ムカパ (CCM)	4,026,422 (61.8%)
ムレマ (NCCR)	1,808,616 (27.8%)
リブンバ (CUF)	418,973 (6.4%)
チェヨ (UDP)	258,734 (4.0%)
無効	333,936

連合共和国国会議員選挙

	〔選挙区〕	〔女性〕	〔ザンジバル〕	〔総議席〕	〔得票率〕
CCM	186	28	5	219	(59.2%)
CUF	24	4	0	28	(5.0%)
NCCR	16	3	—	19	(21.8%)
CHADEMA	3	1	—	4	(6.2%)
UDP	3	1	—	4	(3.3%)
計	232	37	5	274	

(注) 女性代表は獲得議席に対する比例代表、ザンジバル代表はザンジバル議会選出

野党はCUFがペンバ南北2州、NCCRがキリマンジャロ州(ムレマの出身地)で圧勝。全25州の内、CCMが50%を切ったのは前記3州以外にマラ州(ニエレレの出身地)。さらに野党が40%以上とって健闘したのは、アルーシャ、ムベヤ、モロゴロ、シニャンガ、ムワンザ、カゲラ、タボラ、キゴマの8州。それ以外はCCMが圧勝したが、特にムカパの出身地であるムトワラ州では83%の高さだった。

しかしこれを都市部で見ると、ダルエスサラーム、ザンジバルを除く18の都市部選挙区では、CCMの得票率は52%まで低下する。さらに今回全国平均76.7%の投票率に対し、41.8%と低率を示したダルエスサラームの再選挙が本来どおり行なわれていたと仮定すれば、野党票は都市部では50%を超えていたと思われる。というのはダルエスサラームの1回目の非公式の発表では、ムレマが僅差ではあるがムカパを押さえていたこと、筆者の調査によれば2回目の投票の棄権者は圧倒的に野党支持者が多いことからの推測である。

投票率は全国平均で76.7%、ザンジバル全体で90.8%、ムトワラで89.9%、キリマンジャロで87.7%と高率を示した。ただこの数字は選挙登録者数(893万人)に対する投票者数(685万人)の数字で、選管が示した見込み登録者数(1102万人)から見ると62.1%になる。さらに言うと、人口推計からみた推定有権者数は1350万人にのぼるから、実際の投票率は50%強ということになる。

5 CCM圧勝の内実

CCMの勝因は、まず全国的組織がある唯一の政党で、これが特に地方で威力を発揮したことが挙げられよう。「国父」ニエレレの精力的な全国キャンペーン、それに引き替え野党側の足並みの乱れもあった。CCM側の資金に物を言わせた物量攻勢

も目立った。これは、ムレマに危機感をもったインド系商人がCCMに援助を注いだこと、新興実業家たちのCCMからの立候補、現職大臣・高級官僚たちによる公金を流用した選挙運動等による。投票・開票時における不正も公然の秘密であり、全国4万カ所以上にのぼる投票所を、250人程度の国際監視団が監視できないのは自明である。

それは現体制で利益を享受している層になりふり構わずその利権を守ったと言うことだが、さて圧倒的多数の民衆はどう行動したのだろうか。タンザニアはCCMの一党独裁下で世銀の統計では世界の最貧国中下から2番目まで落ち込み、人々は口を開けば生活の困難、社会主義への批判、役人の汚職を非難する。ダルエスサラームでは今20紙以上のスワヒリ語新聞が流通していて、それを読むかぎりCCMに勝ち目はないと思われた。しかし国民の投票行動はかなり保守的であった。「CCMなんて皆泥棒だ」と毒づきながらCCMに投票したのだ。野党支持層は再選挙ではほとんど棄権しているが、投票した者の中では国会議員選挙では野党を支持しながら大統領はムカパに入れた人もいる。

そうした消極的なCCM支持の理由は、一つはムレマの「汚職摘発」一点ばりの運動に何とはなしに不安を持っていたことが挙げられる。大げさな公約はともかく、野党各党は新しい政府の青写真を提示できなかった。ムレマを含め多くの野党のリーダーもかつてはCCMの高官だったわけで、どれほど体制が変わるか疑心暗鬼だったこともある。余り変化が期待できないとなると、勝ち馬に乗る保身が働く。更にムレマが政官財界で有力なチャガ人であることに対する漠然とした反発もあった。それはタンガ、コースト、リンディ、ムトワラにおける低い得票率に現われていると思われる。

6 「国家」と民衆の知恵

私は1975年というウジャマー華やかなりし頃、「国」を建設しようとする熱気を垣間見ることができた。84年に再びタンザニアにやって来て、経済の破綻、人々の苦境・無気力を目の当たりにし、その民衆に「開発税」という名の人头税を課す国家に対し「植民地時代の方がましだ」と言う人々と出会った。「国家」は、タンザニアを含め、アフリカの民衆に何をもたらしただろうか。「国民国家」を課せられて、民衆にとっていいことがあったのだろうか。タンザニアの民衆にとって「タンザニア連合共和国」の存在は重荷になっているのではないか。そういう「国家」でも必要だというところをタンザニア人はどこで折り合いをつけているのだろうか。

今回の総選挙でのタンザニア民衆の選択は、外国人が心配していた暴動その他が起こらなかったことを含めて、タンザニア人の気質に帰することもできる。つまり厳しい独立闘争を経験していないことからくる温和さ、やさしさ、あるいは軟弱さは、隣のケニアと比べてみるとよく分かる。しかし最近考えるのは、これはもっと大きなタンザニア人の知恵なのではないかということである。たとえば、ソマリア、あるいはルワンダやブルンジのような「国家」の有り様を思い浮かべればよい。民衆はCCMに圧倒的な支持を与えながらも、ダルエスサラーム7選挙区の再選挙で、野党の候補として唯一当選した男をすでに5年後の大統領候補だと、したたかにもうわさし合っている。民衆は複数政党になった議会を興味深く見守りながら、「国家」という厄介な代物を、じっくりと飼い馴らしていくのではないかと思うこの頃である。

(ねもと・としみち/ダルエスサラーム日本語補習校)